

例題1 2重積分(1)

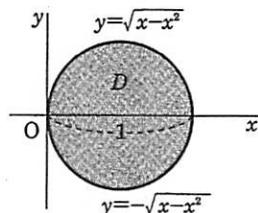
(1) つぎの2重積分を求めよ.

$$\iint_D \sqrt{x} dx dy, \quad D: x^2 + y^2 \leq x$$

(2) $f(x, y) = 1$ のとき, $\iint_D f(x, y) dx dy$ は D の面積に等しいことを示せ.

解答 (1) $x^2 + y^2 = x$ は $\left(x - \frac{1}{2}\right)^2 + y^2 = \left(\frac{1}{2}\right)^2$ と変形することによって, 中心が $(1/2, 0)$ で半径が $1/2$ の円である. D はこの円の周および内部である. この D を x に関する単純な領域と考える (p.86). よって,

$$\begin{aligned} I &= \iint_D \sqrt{x} dx dy = \int_0^1 dx \int_{-\sqrt{x-x^2}}^{\sqrt{x-x^2}} \sqrt{x} dy \\ &= \int_0^1 [\sqrt{xy}]_{-\sqrt{x-x^2}}^{\sqrt{x-x^2}} dx \\ &= 2 \int_0^1 \sqrt{x} \sqrt{x-x^2} dx = 2 \int_0^1 x \sqrt{1-x} dx \end{aligned}$$



いま, $\sqrt{1-x} = t$ とおくと, $x = 1-t^2$, $dx = -2t dt$. よって

$$\begin{aligned} 2 \int_0^1 x \sqrt{1-x} dx &= 2 \int_1^0 (1-t^2)t(-2t) dt \\ &= 4 \int_0^1 (t^2 - t^4) dt = 4 \left[\frac{t^3}{3} - \frac{t^5}{5} \right]_0^1 = \frac{8}{15} \end{aligned}$$

(2) p.85の2重積分の定義(1)により, $f(x, y) = 1$ のとき $f(x_i, y_i) \Delta S_i = \Delta S_i$ である. よって

$$\iint_D f(x, y) dx dy = \lim_{d \rightarrow 0} \sum_{i=1}^n f(x_i, y_i) \Delta S_i = \lim_{d \rightarrow 0} \sum_{i=1}^n \Delta S_i = D \text{ の面積}$$

問題

1.1 つぎの2重積分を求めよ.

$$(1) \iint_D \frac{x}{x^2 + y^2} dx dy, \quad D: y - \frac{1}{4}x^2 \geq 0, y - x \leq 0, x \geq 2.$$

$$(2) \iint_D \sqrt{xy - y^2} dx dy, \quad D: 0 \leq y \leq 1, y \leq x \leq 10y$$

例題2 2重積分(2)

(1) つぎの2重積分を計算せよ.

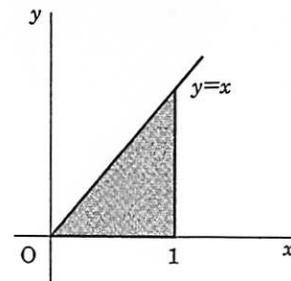
$$\iint_D \sqrt{4x^2 - y^2} dx dy, \quad D: 0 \leq y \leq x \leq 1$$

(2) 曲面 $z = e^{px+qy}$ ($pq \neq 0$)

が xy 平面の正方形 $D = \{(x, y) : 0 \leq x \leq 1, 0 \leq y \leq 1\}$ との間につくる立体の体積を求めよ.

解答 (1) 右図を x に関する単純な領域とみる. p.35の不定積分の公式(7)より,

$$\begin{aligned} I &= \int_0^1 dx \int_0^x \sqrt{4x^2 - y^2} dy \\ &= \int_0^1 \left[\frac{y}{2} \sqrt{4x^2 - y^2} + \frac{4x^2}{2} \sin^{-1} \frac{y}{2x} \right]_0^x dx \\ &= \int_0^1 \left(\frac{x}{2} \sqrt{3x^2} + 2x^2 \sin^{-1} \frac{1}{2} \right) dx \\ &= \int_0^1 \left(\frac{\sqrt{3}}{2} x^2 + 2x^2 \frac{\pi}{6} \right) dx = \left[\frac{\sqrt{3}}{6} x^3 + \frac{\pi}{3} \cdot \frac{x^3}{3} \right]_0^1 = \frac{1}{3} \left(\frac{\sqrt{3}}{2} + \frac{\pi}{3} \right) \end{aligned}$$



(2) $I = \iint_D e^{px} \cdot e^{qy} dx dy$ で変数に関して分離された形である. p.87の(10)より

$$I = \left(\int_0^1 e^{px} dx \right) \left(\int_0^1 e^{qy} dy \right) = \left[\frac{e^{px}}{p} \right]_0^1 \cdot \left[\frac{e^{qy}}{q} \right]_0^1 = \frac{e^p - 1}{p} \cdot \frac{e^q - 1}{q}$$

問題

2.1 つぎの2重積分を求めよ.

$$(1) \iint_D \log \frac{x}{y^2} dx dy, \quad D: 1 \leq y \leq x \leq 2$$

$$(2) \int_0^\pi \left\{ \int_0^{1+\cos \theta} r^2 \sin \theta dr \right\} d\theta \quad (\text{p.65の図を参照})$$

$$(3) \iint_D y dx dy, \quad D: \sqrt{x} + \sqrt{y} \leq 1 \quad (\text{p.53の上図を参照})$$

4.5 正規直交基底

• 正規直交基底 •

正規直交系 m 個のベクトル $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_m$ が

$$\mathbf{a}_i \cdot \mathbf{a}_j = \delta_{ij} \quad (\text{クロネッカーのデルタ})$$

をみたすとき $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_m$ を正規直交系であるという. 正規直交系は 1 次独立である.

正規直交基底 基底が正規直交系るとき正規直交基底という. 計量ベクトル空間 V は正規直交基底をもつ. \mathbf{R}^n の標準的な基底 $\mathbf{e}_1, \mathbf{e}_2, \dots, \mathbf{e}_n$ は正規直交基底である. $\mathcal{B} = \{\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_m\}$ ($m = \dim V$) を V の正規直交基底とする.

$$\mathbf{a} = (x_1, x_2, \dots, x_m)_{\mathcal{B}}, \quad \mathbf{b} = (y_1, y_2, \dots, y_m)_{\mathcal{B}}$$

を V のベクトル \mathbf{a}, \mathbf{b} の \mathcal{B} に関する成分とすると, 内積は自然な内積のときと同じことになる. すなわち

$$\mathbf{a} \cdot \mathbf{b} = x_1 y_1 + x_2 y_2 + \dots + x_m y_m$$

グラム・シュミットの直交化法 V の基底 $\mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2, \dots, \mathbf{x}_m$ ($m = \dim V$) からつぎの手順によって正規直交基底 $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_m$ を作る方法をグラム・シュミットの直交化法という.

$$\mathbf{y}_1 = \mathbf{x}_1$$

$$\mathbf{a}_1 = \frac{\mathbf{y}_1}{|\mathbf{y}_1|}$$

$$\mathbf{y}_2 = \mathbf{x}_2 - (\mathbf{x}_2 \cdot \mathbf{a}_1)\mathbf{a}_1$$

$$\mathbf{a}_2 = \frac{\mathbf{y}_2}{|\mathbf{y}_2|}$$

$$\mathbf{y}_3 = \mathbf{x}_3 - (\mathbf{x}_3 \cdot \mathbf{a}_1)\mathbf{a}_1 - (\mathbf{x}_3 \cdot \mathbf{a}_2)\mathbf{a}_2$$

$$\mathbf{a}_3 = \frac{\mathbf{y}_3}{|\mathbf{y}_3|}$$

...

...

$$\mathbf{y}_m = \mathbf{x}_m - (\mathbf{x}_m \cdot \mathbf{a}_1)\mathbf{a}_1 - (\mathbf{x}_m \cdot \mathbf{a}_2)\mathbf{a}_2 - \dots - (\mathbf{x}_m \cdot \mathbf{a}_{m-1})\mathbf{a}_{m-1} \quad \mathbf{a}_m = \frac{\mathbf{y}_m}{|\mathbf{y}_m|}$$

正規直交基底の補充 (取り替え) 定理 $\dim V = m$ とする. $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_d$ を正規直交系とすると, $m-d$ 個の V のベクトル $\mathbf{a}_{d+1}, \mathbf{a}_{d+2}, \dots, \mathbf{a}_m$ を選んで, $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_d, \mathbf{a}_{d+1}, \mathbf{a}_{d+2}, \dots, \mathbf{a}_m$ を V の正規直交基底であるようにすることができる.

• 2組の正規直交基底の関係 • $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_m$ を V の正規直交基底, $\mathbf{a}'_1, \mathbf{a}'_2, \dots, \mathbf{a}'_m$ を V のベクトルとし

$$\mathbf{a}'_j = p_{1j}\mathbf{a}_1 + p_{2j}\mathbf{a}_2 + \dots + p_{mj}\mathbf{a}_m \quad (j = 1, 2, \dots, m)$$

とする. このとき

$$\mathbf{a}'_1, \mathbf{a}'_2, \dots, \mathbf{a}'_m \text{ が正規直交基底} \iff P = [p_{ij}] \text{ が } m \text{ 次直交行列} \quad ({}^t P P = E)$$

例題 13

直交行列

(a) 2 次の正方行列 $P = [\mathbf{x}_1 \ \mathbf{x}_2]$ が直交行列であるための必要十分条件は $\mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2$ が互いに直交する単位ベクトル (\mathbf{R}^2 の正規直交基底) であることを示せ.

(b) $\begin{bmatrix} a & -1/2 \\ 1/2 & b \end{bmatrix}$ が直交行列であるとき, a, b を求めよ.

【解答】 (a) P が直交行列 (${}^t P P = E$) であると

$${}^t P P = \begin{bmatrix} {}^t \mathbf{x}_1 \\ {}^t \mathbf{x}_2 \end{bmatrix} [\mathbf{x}_1 \ \mathbf{x}_2] = \begin{bmatrix} {}^t \mathbf{x}_1 \mathbf{x}_1 & {}^t \mathbf{x}_1 \mathbf{x}_2 \\ {}^t \mathbf{x}_2 \mathbf{x}_1 & {}^t \mathbf{x}_2 \mathbf{x}_2 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \end{bmatrix}$$

から

$${}^t \mathbf{x}_1 \mathbf{x}_1 = |\mathbf{x}_1|^2 = 1, \quad {}^t \mathbf{x}_1 \mathbf{x}_2 = \mathbf{x}_1 \cdot \mathbf{x}_2 = 0, \quad {}^t \mathbf{x}_2 \mathbf{x}_2 = |\mathbf{x}_2|^2 = 1$$

だから $\mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2$ は互いに直交する単位ベクトルである.

逆に, $\mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2$ が互いに直交する単位ベクトルなら $P = [\mathbf{x}_1 \ \mathbf{x}_2]$ は ${}^t P P = E$ をみたすから直交行列である.

(b) (a) から

$$a^2 + (1/2)^2 = 1, \quad -a/2 + b/2 = 0, \quad (-1/2)^2 + b^2 = 1$$

だから

$$a = b = \pm\sqrt{3}/2$$

である.

【注意】 直交行列 P の行ベクトルも互いに直交する単位ベクトルである. 一般に n 次の直交行列の列 (行) ベクトルは互いに直交する単位ベクトル (\mathbf{R}^n の正規直交基底) である.

問題

13.1 つぎの行列が直交行列であるように a, b, c, d を定めよ.

$$(a) \begin{bmatrix} 1/\sqrt{2} & a \\ b & -1/\sqrt{2} \end{bmatrix} \quad (b) \begin{bmatrix} 1/\sqrt{6} & 1/\sqrt{3} & a \\ 2/\sqrt{6} & -1/\sqrt{3} & b \\ 1/\sqrt{6} & 1/\sqrt{3} & c \end{bmatrix}$$

$$(c) \begin{bmatrix} 5/13 & a & 0 \\ b & -5/13 & c \\ d & 0 & 1 \end{bmatrix}$$

13.2 2 次の直交行列 P は $P = \begin{bmatrix} \cos \theta & -\sin \theta \\ \sin \theta & \cos \theta \end{bmatrix}$, または $P = \begin{bmatrix} \cos \theta & \sin \theta \\ \sin \theta & -\cos \theta \end{bmatrix}$,

($0 \leq \theta < 2\pi$) であることを示せ.

第2問 標準 《極値, 接線, 面積》

(1) $f(x) = x^3 - px$ より

$$f'(x) = \boxed{3}x^{\boxed{2}} - p$$

関数 $f(x)$ が $x=a$ で極値をとるならば, まず, $f'(a)=0$ が成り立つことから

$$3a^2 - p = \boxed{0} \quad \dots\dots \textcircled{1}$$

さらに, $x=a$ の前後での $f'(x)$ の符号が変化しなければならないので, $p > 0$ でなければならない。なぜならば, $p \leq 0$ のときはつねに $f'(x) = 3x^2 - p \geq 0$ であるが, $p > 0$ であれば, $\textcircled{1}$ を満たす実数 $a (\neq 0)$ が存在し, $f'(x) = 3x^2 - p = 3x^2 - 3a^2 = 3(x+a)(x-a)$ となり, $x=a$ の前後でたしかに $f'(x)$ の符号が変化するからである。したがって, 工 に当てはまるものは ① である。

(2) 関数 $f(x)$ が $x = \frac{p}{3}$ で極値をとることから, $a = \frac{p}{3}$ であるとして, $\textcircled{1}$ より

$$3 \times \left(\frac{p}{3}\right)^2 - p = 0 \quad \frac{p^2}{3} - p = 0$$

$$p(p-3) = 0 \quad \therefore p = 0, 3$$

また, (1) より $p > 0$ でなければならないから, $p = \boxed{3}$ である。このとき

$$f(x) = x^3 - 3x, \quad f'(x) = 3x^2 - 3 = 3(x+1)(x-1)$$

より $y=f(x)$ の増減表は右のようになり, $f(x)$ は $x = \boxed{-1}$ で極大値 2 をとり, $x = \boxed{1}$ で極小値 -2 をとることがわかる。

x	...	-1	...	1	...
$f'(x)$	+	0	-	0	+
$f(x)$	↗	2	↘	-2	↗

曲線 $C: y=f(x) = x^3 - 3x$ の接線で, 点 $A(1, -2)$ を通り傾きが 0 でないものを ℓ とするとき, 接点の座標を $(b, f(b))$ とすれば, ℓ の方程式は

$$y - f(b) = f'(b)(x - b)$$

$$y = (\boxed{3}b^2 - \boxed{3})(x - b) + f(b)$$

$$= (3b^2 - 3)(x - b) + b^3 - 3b$$

$$= (3b^2 - 3)x - 2b^3 \quad \dots\dots \textcircled{2}$$

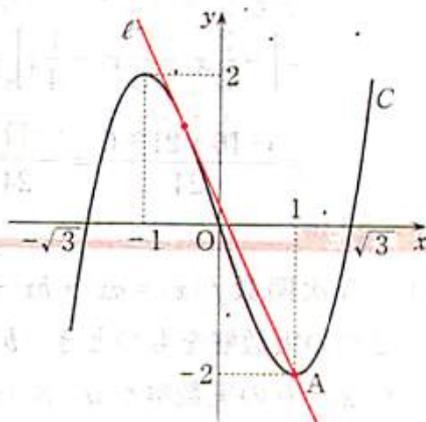
と表せる。 ℓ が点 A を通ることから

$$-2 = (3b^2 - 3) - 2b^3$$

整理すると

$$\boxed{2}b^3 - \boxed{3}b^2 + 1 = 0$$

$$(b-1)(2b^2 - b - 1) = 0 \quad (b-1)^2(2b+1) = 0$$



$$\therefore b = \boxed{1} \cdot \frac{\boxed{-1}}{\boxed{2}}$$

$b=1$ のときには、接点がAとなり接線の傾きが0となってしまうので、 $b \neq 1$ であるから、 $b = -\frac{1}{2}$ である。よって、 ℓ の方程式は、②より

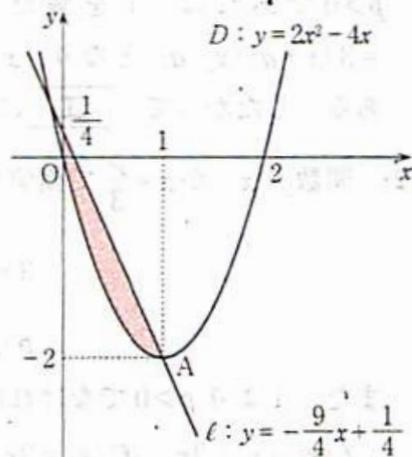
$$y = \left(3 \times \frac{1}{4} - 3\right)x - 2 \times \left(-\frac{1}{8}\right)$$

$$= \frac{\boxed{-9}}{\boxed{4}}x + \frac{\boxed{1}}{\boxed{4}}$$

点A(1, -2)を頂点とし、原点を通る放物線Dの方程式は、 $y = k(x-1)^2 - 2$ (k は実数)が原点を通ると考えることにより $0 = k - 2$ すなわち $k = 2$ であるから

$$y = 2(x-1)^2 - 2 \\ = \boxed{2}x^2 - \boxed{4}x$$

ℓ とDで囲まれた図形のうち、不等式 $x \geq 0$ の表す領域に含まれる部分(右図の赤色部分)の面積Sは



$$S = \int_0^1 \left\{ \left(-\frac{9}{4}x + \frac{1}{4}\right) - (2x^2 - 4x) \right\} dx$$

$$= \int_0^1 \left(-2x^2 + \frac{7}{4}x + \frac{1}{4} \right) dx$$

$$= \left[-\frac{2}{3}x^3 + \frac{7}{8}x^2 + \frac{1}{4}x \right]_0^1 = -\frac{2}{3} + \frac{7}{8} + \frac{1}{4}$$

$$= \frac{-16 + 21 + 6}{24} = \frac{\boxed{11}}{\boxed{24}}$$

解説

(1) 3次関数 $f(x) = ax^3 + bx^2 + cx + d$ ($a \neq 0$)は、 $f'(x) = 3ax^2 + 2bx + c = 0$ が異なる2つの実数解をもつとき($b^2 - 3ac > 0$)極値をもつ。

$f'(x) = 0$ の実数解が α, β ($\alpha < \beta$)であるとき、 $a > 0$ ならば $x = \alpha$ で極大値 $f(\alpha)$ 、 $x = \beta$ で極小値 $f(\beta)$ をとり(山→谷)、 $a < 0$ ならば $x = \alpha$ で極小値 $f(\alpha)$ 、 $x = \beta$ で極大値 $f(\beta)$ をとる(谷→山)。 $f'(x) = 0$ が重解や虚数解をもつとき($b^2 - 3ac \leq 0$)は、 $f(x)$ は極値をもたない。本問で、 $f'(x) = 3x^2 - p = 0$ が異なる2つの実数解をもつのは、 $p > 0$ のときである。